県西の城と内宿地名　―常総両地域の比較から―

遠山　成一

はじめに

戦国後期、東国に内宿という地名が出現し、市村高男氏によって次のようなまとめがなされている(1)。

(1)根小屋の発展形であること、(2) 内宿には多様な発展段階があること、(3) 内宿は基本的には家臣団居住地としての本質があること、(4) 外堀で囲郭され城郭の外郭部としてとらえられていること、(5) 商人や職人の住む宿（外宿）を内宿とともに統合し、戦国城下町を形成していったこと。以上である(2)。

報告者は、この市村氏の論文をもとに、房総における内宿地名について前例を検出し、伊藤毅氏の説く武家地系宿(3)を念頭に検討を加えたことがあった(4)。結論的には、市村氏・伊藤氏の行論をトレースしたに過ぎないが、あえて言えば、房総における同地名は国衆レベルの本城に多く、また交通の要衝である中小規模の城郭にも少数存在することがわかった。

本報告では、この房総の事例を常陸地域にも敷衍できるかを確認し、築城の来歴がある程度わかっている久下田城跡を主に、常陸国内の内宿を検討してみたい。

１．常陸国の内宿地名

管見の限りでは、10 例。行方市（旧北浦町）内宿の木崎城跡と内宿館跡のある内宿を同一とみるか。

10 例中筒戸城跡を除き、ほぼ国衆レベルの領主の本城（本拠地）に形成されている。また、規模の大小の差こそあれ、内宿に対し外宿ともいうべき商工業者の住まう宿が隣接して存在する（筒戸城跡は例外）。

〔事例報告〕

① 久下田城跡→天文 13 年（1544）に、宇都宮氏の脅威に対抗するため、水谷正村（蟠龍斎）によって築城されたという[別本水谷蟠龍記]

「(前略）故に蟠龍、頓（とどまり）て天文十三年十月廿日縄張をなされ、霜月三日迄に惣堀を究め、先小屋懸なされ、移り給い（後略)」

⇒現状の縄張構造からみて、あまりにも短時間で構築されており、主郭周辺のみが造られたか。

字「とはり」の存在（☞縄張図参照）

とはり（戸張・外張）とは…城の出入り口で木戸などのある一帯をさす。内宿は、「とはり」より城の中心部に近いところにある。現状では防御施設らしき構築物は見当たらないが、内宿地区と戸張の間を東西に通る茨城県道・栃木県道 216 号線は堀跡を利用したものか。

② 豊田城跡→豊田氏の本城　小貝川の自然堤防上に築かれる。現状、城本体は河川改

修により壊滅状態とされ(6)、内宿を含む集落が堤防沿いに残る。

字名　内宿（うちやど）・上宿・下宿・北宿・新宿（あらじゅく）・大道添（だいどう）・大道東・大道西など

「大道」の字名が残り、これに沿って宿地名が展開することから、当城は小貝川の自然堤防上に形成された古道と小貝川の水運という、水陸交通の要衝を占める豊田氏の本拠であったと考えられる。

また、中世まで遡ることができるか不明であるが、戦前までは上宿地区より小貝川を渡り、同川左岸の上郷（つくば市）方面に行くことができた。

③筒戸城跡→守谷城の相馬氏の支城。相馬親胤が天正年間の城主とされる。

内宿地区は、城跡から約500m離れた所に位置する。また、外宿に該当するような宿は、付近には存在しない。

④玉造城跡→市村高男氏の研究［市村 1994］

常陸大掾氏の一族行方氏から分かれた玉造氏の本拠。

玉造城跡の麓に根古屋と内宿、霞ヶ浦（常総内海）に沿った街道には上宿・下宿が展開する。さらに霞ヶ浦に面した玉造津には、「浜」とよばれる集落（宿）があった。

表１　常陸国内の内宿地名一覧

	城　名	所　在　地	外宿に対応する宿	城　主　および　特　徴
1	久下田城跡	筑西市樋口	南宿	水谷蟠龍斎築城　とはり地名
2	豊田城跡	常総市本豊田	上宿・新宿・北宿	豊田氏の本拠地（「うちやど」）
3	布川城跡	利根町布川	中宿・浜宿・新宿	府川豊島氏の本拠地
4	石神城跡	東海村石神字内宿	外宿	小野崎氏の本拠地
5	小高城跡	行方市小高	宿	小高氏の本拠地
6	真壁城跡	桜川市真壁	上宿・下宿・新宿	真壁氏の本拠地
7	行方城跡	行方市行方	台宿・神宿・立宿	行方氏の本拠地
8	玉造城跡 *	行方市玉造町甲	上宿・下宿・浜宿	玉造氏の本拠地：根小屋
9	木崎城跡	行方市内宿	上宿・下宿	武田氏の本拠地
9	内宿城跡	行方市内宿	上宿・下宿	木崎城からみて内宿か
10	筒戸城跡	つくばみらい市筒戸	―	相馬氏の支流筒戸氏の本拠地

*印はネゴヤ地名を持つ

２．千葉県の内宿地名

表２　下総・上総・安房国内の内宿地名一覧

	城　名	所　在　地	外宿に対応する宿	城　主　および　特　徴
1	関宿城跡	野田市関宿	台宿	簗田氏の本拠地
2	米本城跡　＊	八千代市米本	上宿・中宿・下宿	村上氏の本拠地
3	助崎城跡　＊	成田市名古屋	中宿・新宿	助崎大須賀氏の本拠地
4	大和田城跡	成田市大和田	宿	不明
5	松子城跡　＊	成田市松子	地名としては無	大須賀本宗家の本拠地
6	鏑木城跡	旭市鏑木	宿	鏑木氏の本拠地
7	八幡城跡	山武市埴谷	宿	不明（押尾氏ヵ）
8	成東城跡	山武市成東	上町・下町	成東千葉氏の本拠地
9	本納城跡	茂原市本納	中宿・(本宿)	土気酒井氏の支配拠点
10	一宮城跡	長生郡一宮町一宮	社宿	一宮正木氏の本拠地
11	勝浦城跡　＊	勝浦市勝浦	「志ゆく」	勝浦正木氏の本拠地
12	万喜城跡	いすみ市万木	伊保宿・筑場宿他	土岐氏の本拠地
13	秋元城跡　＊	君津市清和市場	上宿・中宿・下宿	秋元氏→里見氏
14	勝山城跡	南房総市富山町		正木氏

千葉県の内宿地名は 14 例。*印は根小屋地名をもつもの

国衆クラスの本城がほとんどで、支城の場合は支配拠点として重要な位置を占める。また、これ以外に交通の要衝に位置する城跡（表２の４・７）が見られる。

〔事例報告〕

①万喜城跡→万喜土岐氏の本拠

内宿は夷隅川を前面の防御とし、南の堀は山麓まで、北の堀は山の法面から竪堀を落とし、さらに堀切で夷隅川まで伸ばし、完全な防御を図る。おそらく城主の居館があったものと考えられる。

外宿にあたるものは、筑場宿・伊南宿（内宿をはさんだ両隣にあたる)、伊保宿（西山麓）が城域周辺に存在する。

②助崎城跡→助崎大須賀氏の本拠

根古屋がⅡ郭の南麓に位置するのに対し、内宿はⅠ・Ⅱ郭とほぼ同じ標高にあって、土塁・堀等で区画された空間である。街道は北側（滑河方面）から新宿（しんじゅく）・須賀町・中宿と来て、城域である内宿に入らず、横町から旧大栄町吉岡（きちおか）（現成田市）方面に延びる。

３. 両地域を比較して

両地域とも、国衆レベルの本拠もしくは支城クラスの城にともなう場合がほとんどである。房総の場合、そこまでの規模はないが、交通の要衝を占める城郭にともなう例が少数あった。

また、両地域に共通して多くの場合、堀や土塁、もしくは防御的に適した地形によって守られていた。

ネゴヤ地名をもつものが両地域とも見られたことから、一つの類型としてネゴヤから内宿への発展形が考えられた。

注

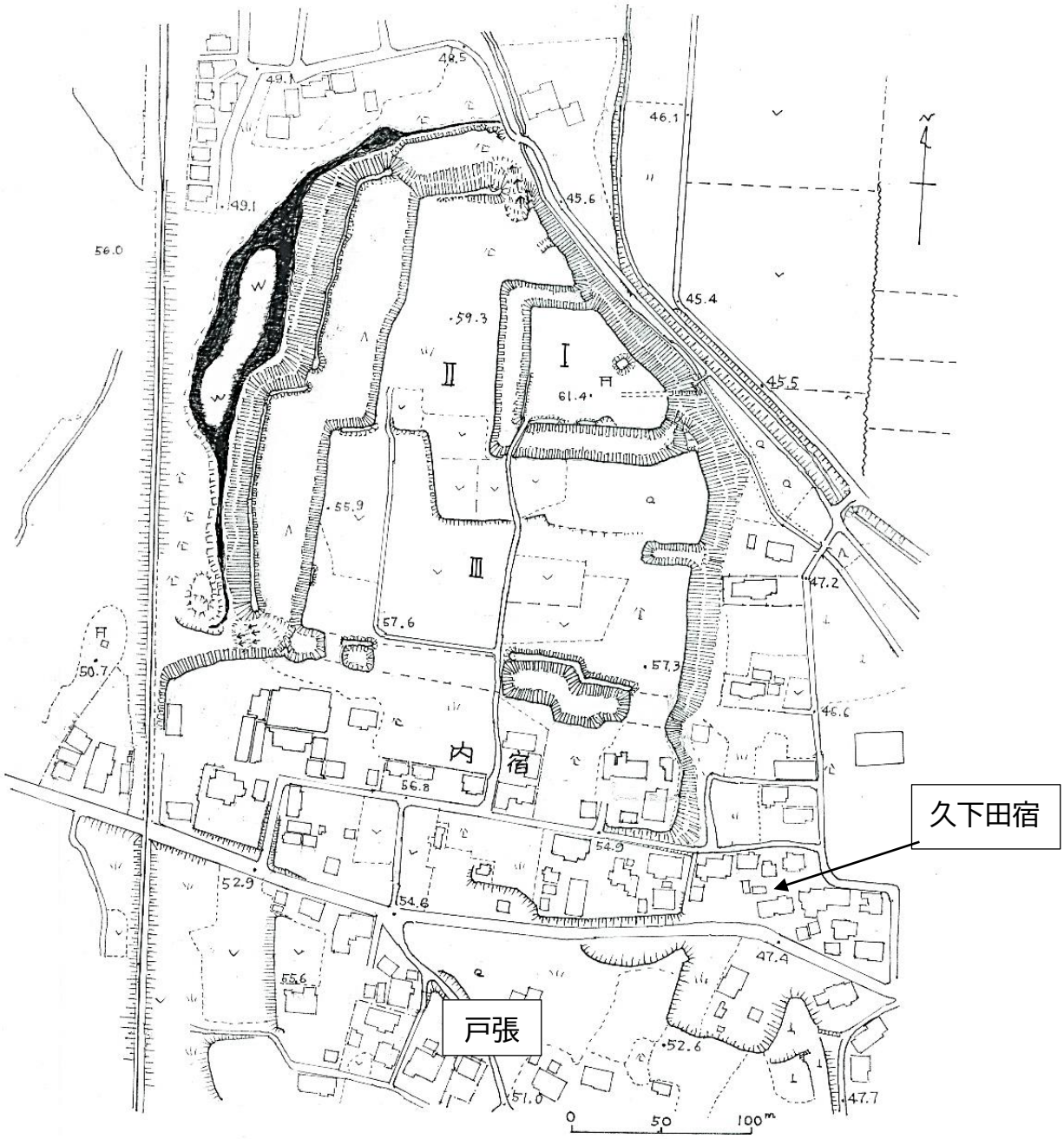
(1) まとめに誤りがあるとすれば、報告者の理解不足によるものである。
(2) 市村高男「中世東国における宿の風景」（網野善彦・石井進編『中世の風景を読む２都市鎌倉と坂東の海に暮らす』、新人物往来社、1994 年）
(3) 万一、誤りがあれば、報告者の理解不足によるものである。
(4) 伊藤毅「「宿」の二類型」（五味文彦・吉田伸之編『都市と商人・芸能民　中世から近世へ』、山川出版社、1993 年）
(5) 遠山成一「戦国後期房総における城下集落の存在形態－内宿地名の検討を中心に－」（佐藤博信編『中世東国の社会構造　中世東国論下』、岩田書院、2007 年）ここでは、房総における内宿地名 14 例をもとに検討したが、その後、稲村城跡はここにいう内宿には該当せず（「うちがやど」と呼称し、該期は戦国前期）、安房勝山城跡の内宿地名が遺漏していたことに気づいた。
(6) 現地踏査および空中写真（戦後まもなくの）から、「中城」地区は畑地として地下に遺構が残存している可能性が考えられる。

【参考文献】本文・注であげた他

1996 年　『千葉県中近世城跡研究調査報告書　第 17 集　―助崎城跡測量調査報告―』千葉県教育委員会
2017 年　茨城城郭研究会編『改訂版　図説茨城の城郭』国書刊行会
2023 年　『茨城県の中世城館―茨城県中近世城館跡総合調査報告書―』茨城県教育委員会

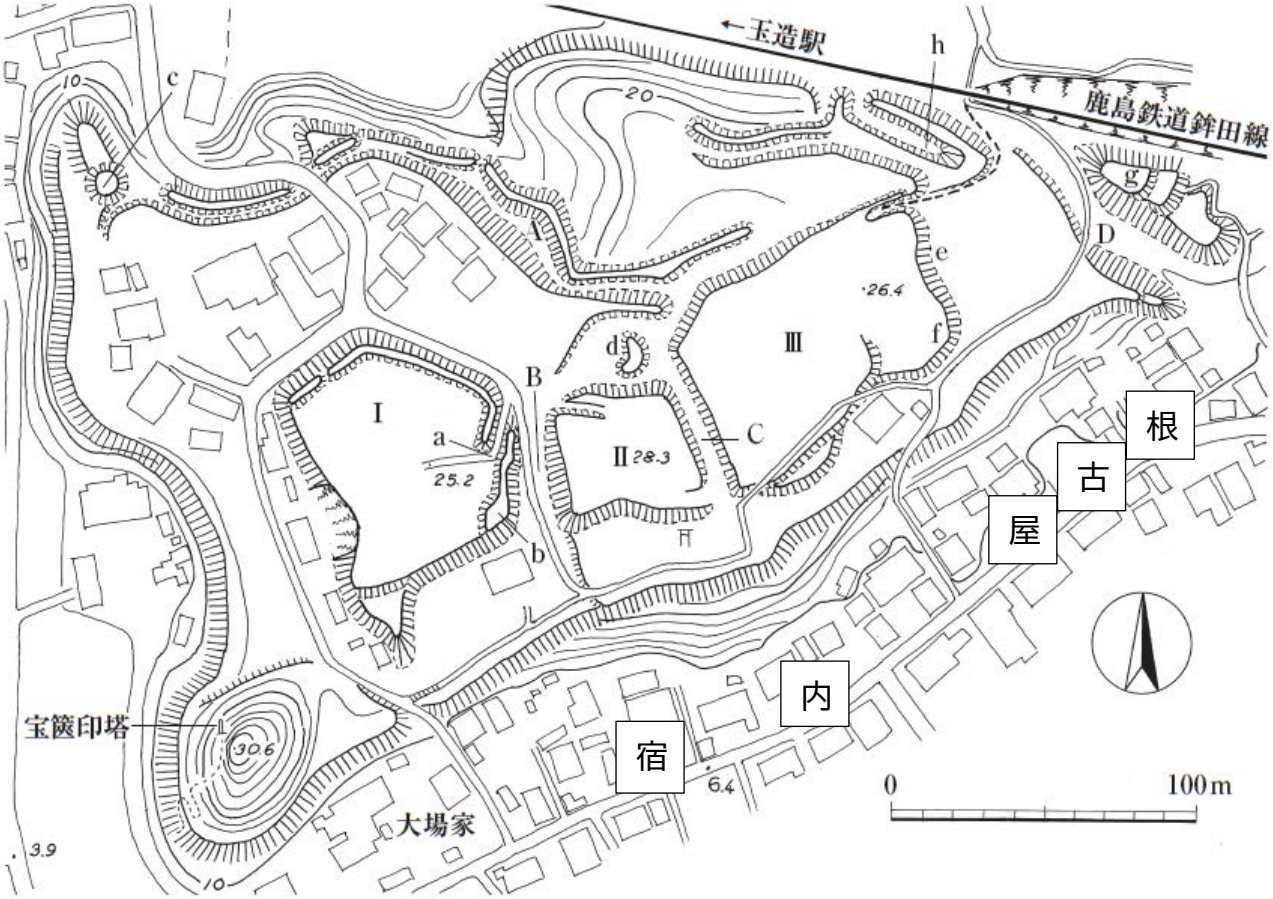
資料編

１．久下田城跡縄張図



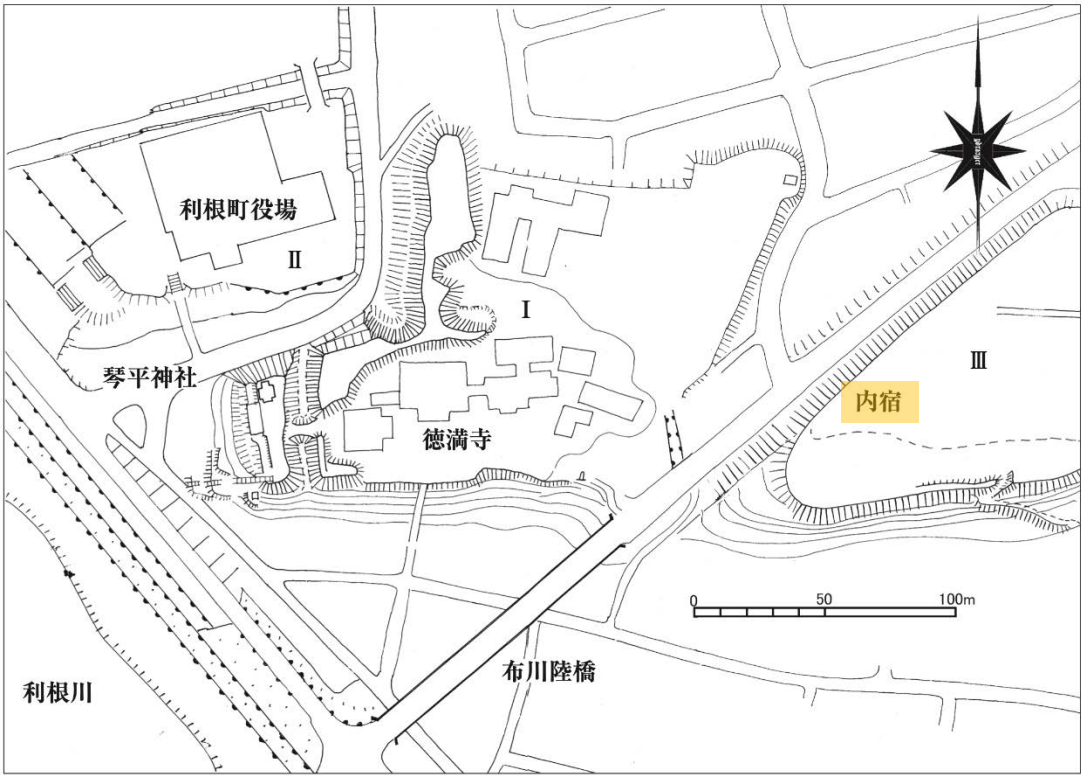
出典　『茨城県の中世城館 - 茨城県中世城館跡総合調査報告書 - 』茨城県教育委員会 2023 年
（遠山成一　作図）一部加筆

２．玉造城跡縄張図



出典　『同前』（西山洋氏　作図）一部加筆

３．布川城跡縄張図　　本間朋樹氏作図　出典『改訂版　図説茨城の城跡』



４．万喜城跡縄張図

出典　『図説　中世城郭事典一』（三島正之氏　作図）一部加筆

５．助崎城跡縄張図

出典　『千葉県所在中近世城跡研究調査報告書　第 17 集』（遠山成一　作図）一部加筆